
シルバー・ガン

シンイチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シルバー・ガン

【Nコード】

N4415A

【作者名】

シンイチ

【あらすじ】

現在から十年前に発令された「ストリートチルドレン抹殺」発令したのは日本警察の長官。その令は警察内部のみで公開されたが、国民には「殺し屋の狂気か？」ということとで広まった。そして、国民の間ではこの事件は迷宮入りということで収まった。しかし、「ストリートチルドレン抹殺」には隠されたもくろみがあった。

第1話 銀眼の少年

「ストリートチルドレン抹殺」

一般人ならば、

「いくらストリートチルドレンたちが犯罪を犯したり悪戯をするからといって殺すことはないじゃないか。

むしろ、悪いのはストリートチルドレンの存在する日本という環境を作ってしまった私たちが悪いのではないか？ そうだ、私たちが悪い」

そう思うだろう。

しかし、津田俊彦ツダ トシヒコはそんな疑問はもっていないかった。

例え「ストリートチルドレン抹殺」の命令が日本警察から出ていようと。

俺は殺し屋としての役目を果たすだけだ。

津田は警察に雇われたときのことを思い出した。

日本警察中央所の地下に作られた秘密の部屋。

日本警察のトップに君臨する者。

つまり、日本警察庁長官である郷原武志ゴウハラ タケシがその部屋の

いかにも「俺はトップだ」と威張るようなやつが座るいすに腰掛け
ていた。

その前には向かい合うように数人の男たちが立っていた。

俊彦もその中の一人であった。

郷原武志は「ストリートチルドレン抹殺」の話をした。

最近、ストリートチルドレンが増え、

悪さをしたので皆殺しにしてほしいということだった。

もちろん、殺しは犯罪なので警察が直接手を下すことなどできない。だから殺し屋の君たちに殺してもらって、

警察は捜査をするフリをする。

そして、解決できずに迷宮入り。

国民には「殺し屋の狂気でストリートチルドレン抹殺」

と伝わり、警察がやったとは思えない。

そして、君たちにはたんまり報酬をよこそう。

といった内容だった。

そこにいた数人の殺し屋は俊彦の知り合いだった。

俊彦が郷原のために呼んだのだった。

というのも、俊彦と郷原は知り合い、いや、親友だった。

俊彦は以前警察官だった。しかし、殺し屋の道にそれた。

郷原はそのときの同期だった。

そして、突然連絡があり、頼みがあるとのことだった。

報酬もいい、いや、よすぎるくらいだったし

昔のよしみということもあって引き受けたのだった。

俊彦はロングコートをまとい帽子を深くかぶり通りを歩いていた。

日本は以前に比べて治安も悪くなり、ゴミゴミしくなった。

街路も昔と比べると整備が崩れているところが目立つ。

どこで日本は道を間違ったのだろうか？

俊彦はコートをひるがえし、路地に入った。

ビルの側面に据えられてある大型のゴミ箱に子供たちがたかっていた。

俊彦が現れた瞬間、全員が俊彦を睨んだ。

5人。

薄汚れた服を身にまといゴミをあさっていた。
日本社会環境の悪化が招いた結果が俊彦を睨みつけていた。

俊彦は腰のホルスターから拳銃を取り出した。
子供たちは目を見開き一斉に路地の奥へと走り出した。

彼らにも俊彦たちが彼らの仲間を殺して回っていることが伝わって
いたのだろう。

なれた手つきで狙いを定める。

今までにどれだけ殺しただろうか。

街の静寂を切り裂く銃声があたりに響く。

まず一人。

後頭部から血を流して倒れた。

次に狙ったのは二人固まって逃げようとしていた子供。

銃声が一回に聞こえるほどの早い2連射で後頭部を打ち抜いた。
もちろん即死だ。

痛みは味あわせない。

そして、左の壁側を逃げていた子供を狙う。

右手に握った銃を左手に投げて移した。

すかさずトリガーを引く。

俊彦は左手でも子供を逃がさなかった。

その子も即死。

そこで、俊彦は手を止めた。

俊彦の目の前に立つ子供。

恐怖で立ち尽くしているのではない。

俊彦に立ち向かおうと立っているようだった。

「逃げないのか？」

俊彦は聞いた。

「だって、おじさん。ピストルで僕を撃たないでしょ？」

子供は銀色の目を光らせていった。

かすかに微笑が見えた。銀眼、微笑……懐かしい。

「なぜわかる？」

「だってほかのやつらを撃ったときと握り方が違うもん」

銀眼の少年の首に十字架のペンダントがかかっている事に気づいた。
まさか……。

「すごいな。君の名前は？」

俊彦は自分の考えと現実を答えあわせするように聞いた。

「竜一、ヒムロ リュウイチ氷室竜一」

少年は言った。

……やっぱり。

「俺について来い。銃を教えてやろう」

Powered By 楽天広

第2話 憩いの場

日本警察の東京支部の3階。

廊下を歩いていくと開けた場所に出る。

そこには売店、机、椅子、大型液晶テレビなどがあり、刑事たちの憩いの場となっている。

国の経営方針も危ぶまれるはずだ。

「先輩、先輩」

若い刑事は売店で買ったパンを食べている刑事に言った。
先輩と呼ばれた刑事は答えた。

「どうした？え〜と……誰だっけ？」

若い刑事は笑いながらコーヒーとファイルを両手に持ち、
先輩と呼ばれた刑事の隣に座った。

「やだなあ、また冗談。今年入った中城ナカジョウ健介ケンスケですよ」

「いやあ、悪い悪い。で、何だ？」

この先輩はよく冗談を言うので健介はいつもの流れで自己紹介をした。

ここ最近で10回以上は自己紹介している。先輩に。
健介は本題に入った。

「今度、新人レポート発表会ってのがあるんですよ」

「ああ、俺も新入りのときやったなあ。もう10年以上前か」

「で、僕は――」

健介は声をひそめた。

「ストリートチルドレン抹殺令について調べようと思ってるんですよ。この前、図書室で古い書類を読んでいたらですね、見つけたんですよ」

先輩も声をひそめていった。

「止めておいたほうがいいんじゃないのか？」

「僕は絶対調べます。そして賞金をかつさらうんです！」

周りにいた数人が健介を振り返った。

健介は顔を赤くして言った。

「だから聞かせてください。先輩はそれが起こったときにはもう刑事でしたよね？僕はそのころ、殺し屋ってひどいなあ、って思っていました。でも、まさか警察の仕業だったとは……」

「しょうがねえな……。あれはひどかったな。数十人、いや、もっと多かったっけかな？たくさんの子供が死んだ。俺も遺体撤去に携わったからなあ。んー、なんでもな、その当時の警察庁長官の郷原武志が提案したらしい」

「今の長官の郷原命ゴウハラ ミコトの父ですね？郷原武志はたしか数年前に病気でなくなってますね」

「そうだ。あのボンクラ野郎のな。おっと、これは他言無用だ。それ以上の事は知らねえんだな。まあ、俺が思うにストリートチルドレンを排除するためにこんなことしねえってことだな。なんか別の目的があつたんじゃねえの？」

「そうですね。ありがとうございました。……あ、忘れてた！」

また、周りの数人が健介を振り返った。

「どうした？」

「僕、今日から本城竜彦刑事のもとで研修を受けることになってるんです」

先輩は驚いた顔をした。

「本城っていえば若くして、東京本部の高位刑事になった男か。たしか20何歳かだったな……」

「23歳ですよ。僕より3歳しか年上じゃないんですよ？憧れます」

「そういうのは、俺みたいな年輩平刑事の前では言わないもんだ」

先輩は顔をしかめた。

「すみません。じゃあ本部にいつてきます」

「気を付けろよ」

健介は廊下を走り出したがすぐに何も無いところで躓いてこけてしまった。

さっきの数人がまた振り返った。

健介は顔を赤らめて走っていった。

パンを口に押し込み先輩は呟いた。

「そういえば、中条はいいところの出だったな。だから入ってすぐに東京支部やら、本部研修やらにつくわけか……。でも、本城は完全に実力のみで今の位を手に入れたらしいから……。やっぱり才能がすべてかあ。んー、妻子のためにもがんばるか！」

先輩は立ち上がって歩き出した。

第3話 微笑

日本警察東京本部の地下駐車場に乗り入れる真新しい外車があった。まだ、新米ドライバー感がみえみえの危なっかしい運転だ。中から車に似つかわしくない人物が出てきた。

中条健介だ。

仕立て上げのスーツに身を包み、髪をジェルで整えてある。少し頼りない印象をかもし出している。

今日は本城竜彦のもとでの研修があるので身なりは万全にしていた。

健介はエレベーターに乗り、指定された場所に向かった。34階で降りた。

健介の乗ったエレベーターは30階以上にのみつながるものだったので、

一回止まっただけで34階にたどり着くことができた。

本部は35階建てのビルだ。

つまり34階に部屋をもつということは、

ほぼ長官に匹敵する力を持つということである。

エレベーターから伸びる廊下を歩いていくと観音開きのドアにあたった。

ドアの上にある札には「本城 竜彦」とか書かれていた。札になっている木も最高級品と見える。

健介はノックをした。

「どうぞ」

若い声だが重みのある声の中から聞こえた。

しつれいします、そう言ってから健介は部屋に入った。

床には足音を完全に吸収してしまうほどの絨毯が敷かれ、壁には賞状や絵画がかけられ、

壁に据えてある棚には立てやトロフィーが置かれている。

部屋から本城竜彦の力を感じられた。

部屋の一面はガラス張りになり、

ガラスに背を向けて置かれた机と椅子の一式に本城は収まっていた。

「中条君だね。座って、座って」

来客用に備え付けられた彼の机の前にある椅子を指して言った。

健介は部屋にも驚いたが、彼の気さくさのほうにも驚いた。

よく考えると自分とそう歳は変わらないのだから当然なのかもしれない。

しつれいします、またそう言って椅子に腰掛けた。

そのまま、まどろんでしまいそうなほど心地のよい椅子だった。

「今回はよろしく」

本城は黒い目を輝かせ、微笑をたたえて言った。

「はい、こちらこそよろしくお願いします。本城刑事と事件をともにできて光栄です」

事件は起こらないほうがいいんだけどね、

また、微笑をたたえてそう言った。

その微笑にはなにか引き付けるものがあつた。

彼が上位刑事なのもその助けもあるに違いないと健介は思った。

「さあ、今回取り扱う事件はこれだ」

本城は一枚の紙を掲げて言った。

紙の上部には「津田俊彦殺害」と書かれていた。

健介のほうにも前々から伝わっていた。

都内に住む津田俊彦という男が何者かによって殺害されたのだそう
だ。

津田俊彦は裏の世界では殺し屋をやっていたらしい。

犯人は未だつかまっていない。

捜査本部を立ち上げて捜査するほどのものでもないので、
皮肉なことにこの研修にはぴったりだということだ。

本城と健介で捜査することになったのだ。

健介の父が健介には秘密で頼んだらしい。

警察も大手の社長には頭が下がらないのでやむをえなく受けたのだ
った。

「それで、聞き込みとかからはじめるんでしょうか？」

健介は胸を躍らせて聞いた。

「それはテレビの見すぎだよ。もうある程度目星はつけてあるんだ」

彼の話し方にはまったくの刺がない。

自分の考え方を否定されたにもかかわらず、

一切の嫌悪感を抱かなかった、いや、抱けなかった。

彼は、話術にも秀でているようだった。

「誰なんですか？それは」

「津田俊彦の殺し屋仲間だよ。今日は本人に会ってみて裏づけをは
かる」

「じゃあ、本城刑事の洞察眼や話術による誘導が見れるんですね」

「ハハ……、そんなもの噂だよ。あまり期待しないでくれよ」

また、微笑と和やかな語り口。

健介は本城のとりこになっていた。

本城は立ち上がり言った。

「では、行こうか」

第4話 話術

健介は本城の車に同乗し、ゴミゴミした都内の街を駆けていた。彼の車は日本車で一般人が乗るようなこじんまりとした車だった。彼は贅沢を好むほうの人ではないのだろう。

だから、先ほど見た豪華な部屋は彼の意味ではなく、警察の側が仕立てたのだろう。

健介がいろいろ思いをめぐらせているうちに

都内で最も治安の悪いエリアを走っていた。

そろそろ着くぞ、本城はそう言った。

健介たちは本城が津田俊彦殺害の犯人と目星をつけた

津田の殺し屋仲間の自宅に向かっているのだった。

研修なので特別に容疑者に自宅での聴取を行うことになっていた。

名前は田中聡。タナカ サトシ

40半ばの中年男性だそうだ。

殺人の罪で過去1回逮捕されている。

そして、今まで出所以来、おとなしくしているようだ。

とはいっても、警察の目が届いていないだけかもしれない。

本城は道端に車を止めた。

もうこんな日本だ。路上駐車で云々言ってられないのだ。

本城は手ぶらで歩き出した。

健介はノートや筆記具の詰まった黒かばんを持っていた。

これまた高級皮のかばんだった。

どうやら田中聡はこのアパートの一階に住んでいるらしい。

築ウン十年のボロアパートだった。

家賃が安いという理由でしか選ぶ人はいないだろう、と健介は思っ

た。

どのドアを見ても表札などかかっていなかった。
ワケあり人も大歓迎といったところなのだろう。

本城は上着の内ポケットから取り出した警察手帳を開き何かを確認した。

なにしろこのアパートは表札がないのでどれが誰の家だかわからない。

調べ上げた場所が彼の手帳に書かれていたのだろう。

ここだ、健介の顔を見て言った。

ドアの横にすえつけられたインターホンを押してみる。

するとドアが開き、小柄な男が現れた。

顔中がひげで埋め尽くされている、と喋っていいほどだった。

無言で彼は中に二人を招いた。

彼は招かれざる客を中に入れるような嫌悪の表情を振り向きざまに見せた。

実際にそうなのだろうが。

中は外観から想像できるよりはるかに狭く息苦しかった。

彼なりにかたずけたのだろうが、部屋はゴミゴミしていた。

3枚座布団がしかれ、その真ん中に丸テーブルがあった。

そのうちの二つに本城と健介は座った。

田中は湯飲みにお茶を注いだ。

そして、話は始まった。

「あなたは津田俊彦殺害の容疑者にあげられています」

本城が穏やかに始めた。

「俺は津田を殺してません」

田中はお茶をすすりながら言った。

健介はこのお茶を飲みたくなかった。

……なぜかはあえて言うまい。

「いいえ、物的証拠から見てあなたの犯行だということは確実です」

「だから、やってない」

本城はその時田中の目が泳ぐのを逃さなかった。
確実だ。殺ったのはこいつだ。

中条君、本城はそう言って、手を出した。
はっとしてかばんから一枚の書類を取り出した。
そして本城に渡し、田中の目に入った。

「た、逮捕状……」

驚きが田中の口からこぼれ出た。

「我々が困っているのはあなたを逮捕することではありません。あなたには津田を殺害する動機がない。

ここ数年、あなたと津田の間には関わりがない。したがって、あなたは誰かの依頼で殺したのではないか、と考えたのです。
殺し屋としてね」

田中は自分の殺しによほど自信を持っていた
失敗したことに恐怖を受けているのだろう、と健介は考えた。

「そつだ。俺はあいつに頼まれて殺ったんだ」

「あいつ？」

健介と本城が同時に聞いた。

「そう、郷原命だ。今の日本警察長官の」

「な、……」

健介は絶句した。

自分の属する警察のトップでもあろう者が殺人に手を染めるなんて、そんなことありえない。

「わかった。その話は本当だろうな」

本城が言った。

健介はすかさず反論した。

「なぜわかるんです？こいつは口からでまかせ言ってるだけかもしれないですよ」

「先の会話でこの人の話し方を見させてもらったんだ。人にはそれぞれ感情をあらわすときの話し方というものがある。さっきの話し方は事実を言うときの話し方だった。ということで、俺に嘘をつくのはお勧めしないからな」

なんて洞察眼ときれる頭だろう、健介はあっけにとられた。

第5話 生き続ける権力

耳をつんざくような射撃音があたりに響いている。

本部の地下にある射撃訓練場には本城竜彦一人だった。

そこは一本の通路が走り、

そして通路の片側に金網のドアが並んでいる。

1人に一箇所の個室になっており、個室と個室の間もまた金網で仕切られている。

そのため、隣の仲間と話しながら

射撃練習をするといった光景もしばしば見られた。

本城はちょうど真ん中に位置するスペースを使っていた。

射撃場だけならず署の中も静まり返っていた。

もうすでに深夜を過ぎているからだろう。

そんな中で彼は黙々と的を狙い続けた。

数十メートル先に設置された人型の白黒が同心円状に交互する的を狙う。

そのときの彼の顔は昼間の穏やかな顔つきとは打って変わって、まるで獲物を狙うチーターのようだ。

そして、彼は引き金を引く。

銃声があたりに響き渡る。

弾丸となったチーターは獲物である的の中央を貫いた。

その的にはひとつしか穴が見られない。

それは、彼が一回しか打ち込んでいないわけでもなく、ほかの球が外れたわけでもない。

すべての弾丸が同じ穴をくぐっているのだ。

もう数百発も打っている。

彼の額には汗がにじみ出ていた。
まだ、春先の涼しい陽気なのに。
さらに今は気温の下がる夜だ。
よほどの集中力を必要とするのだろう。

新しい弾を銀色の銃に込めた。
そして、また狙いを定める。
緊迫とした空気があたりを包む。
引き金を引いた。

的に二つ目の穴が開いた。
まるで、本城をあざ笑うかのように。

彼の頭の中で邪念が生じたのだ。
生じずにはいられないだろう。
田中聡の話では長官の郷原命が依頼者つまり主犯格なのだから。
しかも本城の観察によってもその時の田中の話し方は真実の口調だった。

それに間違いはない。
なにせ本城は今までこの洞察眼と銃の腕で今の階級までのし上がったのだ。

学校もいっていなかった彼が。

だから本当に郷原が主犯格であろう。
と言っても田中の証言のみで郷原を捕まえることはできない。
それに郷原が津田を殺さなければならぬ理由もわからない。
わかったとしても権力でもみ消される可能性も大いにある。

いろいろ思案していると通路から足音が聞こえた。
コツ、コツと高い音だ。

どうやらこちらに向かっているらしい。

足音がやんだ。

近くでとまったみたいだ。

隣の金網ドアが開く音がした。

隣に誰かが入ってきた。

「やあ、本城君」

郷原命だ。

「どうも、こんばんわ」

郷原は少し笑みを見せて銃の整備に取り掛かった。
彼は今25歳だ。

彼が長官になったのは彼の父の病死によるためだ。
郷原武志の権力は本人が没してからも生き続けた。
そう、権力が彼を長官にしたのだ。

郷原は自分では長官らしく振舞っているらしいが、
まったく形にすらなっていない。

お偉いさんのボンボン息子丸出しだ。

彼がいまだに長官であるのも郷原武志の権力が生きているからだ。

整備を終えた郷原は言った。

「どうだい？本城君。賭け勝負でもしないかい？」

彼の手の内には黒く光る銃が頼りなく収まっていた。

銃は一流品なのに持ち主がこうだと
こんなにも変わるのだろうか、と本城は思った。

「いえ、結構です。もうギブアップです。今日はこれぐらいにして
おきます」

微笑を交えながら郷原の気を操るように断った。

「そうか、そうか。お疲れさん」

今、話した限りだと人を殺す依頼をしたとは思えない。

いや、ただ罪悪感をこれっぽっちも感じていないからだろうか。
銃を握り足早に個室を出た。

通路を戻っていると、さっきまでいた個室から高笑いが聞こえた。

そして射撃の訓練をはじめたようだ。

ふと振り返ると的を狙って打ったようだが、
あたたった形跡が見られない。

本城は思った。

そう、俺がさっき断ったのはどうやっても勝ってしまうからだよ。
あんたのご機嫌を損ねるといけないからな。

彼は微笑した。

第6話 検索結果

健介と本城は田中の家を訪れた後、田中を連れて本部へ戻った。彼は車の中では放心状態だった。

彼は暴れたりすることもなく難なく本部に戻ることができた。

本城は健介に田中を押し付けてどこかへ行ってしまった。

健介は彼についての手続きなどにおわれることになった。

そのおかげで午後7時ごろになった。

田中の家を出て4時間ほどたっていた。

時間も半端だし、本城は消えてしまっしでやることがなくなった健介は

この機会に本部の資料室でレポートの役に立ちそうなものを探すことにした。

資料室へは以前一度行ったことがあったので、

健介は迷うことなくたどり着くことができた。

部屋の左側は長机と椅子が置いてあり、

奥の机には3台のパソコンが置いてあった。

そのパソコンにはこの部屋にある資料や本の位置が記録されている。

部屋の右側は綺麗に書類や本が棚に納められていた。

健介はパソコンの前の椅子に腰掛けた。

パソコンはすぐに使えるようにずっと起動してある。

健介は画面に表示されている「書類・本名検索」をクリックした。すると検索欄が出てきたので、

「ストリートチルドレン抹殺」

とすばやく打ち込む。

健介は小さいころからパソコンをいじっていたのでタイプは得意だった。

「検索中」

という文字と絶え間なく動く警察庁のマスコットの警察犬の絵が現れた。

数秒すると検索結果が現れた。

9件ヒットした。

本棚からその書類を取り出した。

9束のレポートだった。

健介は長机にレポートを広げて読むことにした。

ここには健介しかいなかったので気兼ねなく調べることができた。

9束のレポートを読んでみると、

先輩に聞いた話と同じことが書いてあった。

それに加えて、雇われた殺し屋のリーダーは

今回殺害された津田俊彦であることがわかった。

さらに、津田は依頼者である郷原武志元長官の古い友人であることもわかった。

健介はそのことをほかの紙に書き写した。

まだ、これだけでは目を引くレポートにはならない、と健介は思った。

9束のレポートを元の位置に戻してから、

再びパソコンに向かった。
検索画面を開き、

「津田俊彦」

と入力してみた。
またあの警察犬が走り回った。

今度は5件のヒットがあった。
その中には先ほどの郷原が津田に依頼したことが書いてあったレポートも

含まれていたので実質3件のヒットだ。

今度も数枚の紙がクリップで留められ、クリアファイルに収められた書類だった。

それらを見て健介は驚いた。

なんと、津田は元刑事だったという。

しかも郷原武志と同期だった。

だが、25歳のときに津田は刑事を辞めている。

この後に殺し屋になったのだろうか、と健介は思った。

健介はさっきと同じ紙に走り書きした。

これはレポートとは関係なさそうだが、

今回の事件に使えるかもしれないと思ったからだ。

津田の同期の名前も数人書いておいた。

書類を棚に戻してから最後に

「郷原武志」

と検索してみた。

先の2つよりも警察犬が長く走っていた。

1000件以上のヒットがあった。

画面をスクロールさせて飛び飛び書類・本のタイトルを見ていると、ひとつの書名が飛び込んできた。

「氷室家の事故死」

健介は手元の紙にある走り書きと画面を見比べた。

氷室。

手元の走り書きにも氷室の文字がある。

ヒムロカスキ
氷室和貴

津田の同期の人間だ。

「氷室家の事故死」というレポートを書棚から持ち出し、机の上に広げた。

「2063年4月 氷室和貴とその妻である美咲ミサキが自動車事故により死亡。長男の氷室竜一は事故当時自宅にあり、事故には遭っていないが、その後行方をくらましている」

氷室と郷原武志は同期で仲がよかった、ともかかれていた。おそらく、これが検索の網にかかったのだろう。

2063年といえば今は2078年だから15年前だ。

なぜ、息子の氷室竜一は行方不明になっているのか。

レポートの内容ではわからなかった。

健介は事故の内容を簡単に同じ紙に書いた。

その後もいろいろ検索してみたがめばしい資料は見つからなかった。

健介が疲労の息を漏らしたところには10時を回っていた。

「もうだめだ。帰ろう」

誰もいない資料室に健介の声が響いた。

第7話 憩いの場 2

「先輩！」

健介の声が廊下の向こう側から聞こえてきた。

先輩と呼ばれた刑事は席について、

コーヒーとサンドイッチを交互に口に運んでいた。

「おう、誰だっけ？」

健介は無意識に近いレベルで、中条健介ですよ。やだなあ。

と言いながら先輩の隣に腰掛けた。

そして、昨日資料室でメモした一枚の紙を見せながら言った。

「あの、ストリートチルドレンのレポートのことを調べたんですよ。前、先輩から首謀者は郷原武志だった、

ということ聞いたのを思い出して調べたら、

『氷室家の事故死』というレポートに当たったんです。

何か先輩知りませんか？郷原の同期つてところが引かかるんです。

それに氷室和貴が長官に任命された後に

事故死っていうのも都合がよすぎませんか？

その後、郷原が長官になっているし」

瞬間、先輩の表情が変わったように健介は思った。

「するどいな。そうだ、氷室家の事故死は郷原がやったといわれている。

氷室和貴は最高に優秀な刑事だったそうだ。

銀色の瞳で並外れた洞察眼を持っていたそうさだ。

それが買われて長官に任命されたんだが、

同期で和貴までは及ばないが、優秀だった郷原は殺害に走ったそうさだ。

そして思惑通り、郷原が長官に任命されたわけだ。

郷原は長官の権力を使い、氷室家は事故死になった」

健介は驚きながら言い返した。

「長官だからって殺しが許される！？」

「そついう世界なんだ。お前の理想の警察はそんなもんだ」

どんな世界にも裏はある。

光のあるところには必ず裏が生まれるというが、

これほどまでに深い裏があるのものなのか。

先輩は健介に追い討ちをかけるように言った。

「この紙を見ると、

お前も知っているように息子の竜一が行方不明になってるだろ？

郷原が殺害を行ったとき、息子は和貴に逃がされていたんだ」

「なぜ？一家で逃げなかったんでしょ？」

「郷原は追いかけてくる。

それから妻を守るために和貴は死ぬ覚悟だったんだろつよ。

それにわかったのは郷原がくる数時間前だ。

息子だけでも、と思ったんだろつ。

そして、氷室竜一はストリートチルドレンになったらしい」

健介の中で全てがつながった。

「まさか」

「そのまさかだな。ストリートチルドレン抹殺は竜一を殺すために発令した、

と考えられるな」

「そのことを先輩は知っていたんですか？」

また、先輩の顔が一瞬変わったように見えた。
今度は曇った。

「いや、お前が熱心に調べようとしてたから、俺も調べたんだよ」

「でも、僕が調べたときは、そんなことわかりませんでした」

「バカ。お前と俺を一緒にするなよ」

「あ、すいません」

健介はなぜか先輩に逃げられたような気がした。

先輩は調べたんじゃないのか？

でも、先輩は一連の事件にかかわってないからわからないはずだ。
やっぱり、思い違いか。

健介は一息ついて立ち上がった。

ありがとうございます、とお礼を言って、
立ち去った。

終盤、先輩の顔色がおかしいような気がした。

でも、そうなる理由がない。

本城刑事の研修で健介は洞察眼を意識しすぎて、
できないことをやろうとして、変なものが
見えているんだろう、と思った。

第8話 本城の意見

健介は車に乗り込んだ。

昨日と同じく、本城のところでの研修がある。

今、健介の心の中は乱れていた。

警察の悪事に、自分は悪事を働いた団体の中にいることに、権力による圧制に。

健介は例の紙を見る。

上から順に自らの筆跡を見直していく。

ふと、健介は目をとめた。

A4サイズのレポート用紙の下のほうに見慣れない文字があった。

「本城刑事にも聞いてみたらどうだ？」

ミミズがのたくったような字だったが何とか読めた。

先輩だ。書いたのは先輩だ。

いつの間に。

先輩の字ははじめてみる。

走り書きでなくともお世辞にも美しいとはいえない筆跡だと健介は思った。

健介の顔に笑みがこぼれた。

それとともに、先の心の乱れも飛んだ。

そうだ、警察の悪事は昔のことじゃないか。

今は、本城刑事をはじめ優秀な刑事がそろっているじゃないか。
今の長官は除くが、

心配することなんかないんだ。

そして、僕もいつか本城さんみたいな優秀な刑事になるんだ。

そう意気込んで健介は車を発進させた。

本城は昨日と同じく、あの豪華な部屋にいた。

少し顔色が悪いように見えたが、寝不足か何かだろう。

なんせ、今の長官が主犯格だという線がでたからだ。

僕は資料室の疲れで深い眠りについたけど。

本城は気さくに挨拶し、席を勧めた。

礼を言つて健介は来客用の椅子に座った。

早速、例の紙を取り出し、軽く説明を添えて本城に見せた。

本城の顔が曇った。

でも、次の瞬間にはいつもの顔だった。

「なるほどな、新人レポね。俺は特別任務やらでやらなかったけど、同期のやつが面倒だとぼやいてたな」

気のせいかもしれないがいつもと声の調子が違うような気がした。

「僕は賞金狙つてがんばってるんですよ。

本城刑事はどう思いますか？」

「氷室家の事故死は実は元長官の郷原武志の仕業っていうのは本当なのか？」

「そうらしいです。支部の先輩刑事から聞いたんです」

「あのストリートチルドレン抹殺は
氷室竜一を始末するためのイベントだった、というわけか」

「あの、って本城刑事もストリートチルドレン抹殺令をご存知なん
ですか？」

「ああ、興味があつて昔調べたことがあるんだ。
だが、そんなところまで行き着かなかった。

もちろん、俺も先輩刑事に聞いたりしたんだがな。
君はいい先輩を持っているようだな」

やはり、本城刑事はいつもと声の調子が違うようだ。
なにか焦っているような気がする。

本城刑事が取り乱すとは何事だろうか。

「はは、ありがとうございます」

健介の礼を最後にこの会話は終わった。

結局、僕はいい先輩を持っている、という意見しか得られなかった。

しばらくの間の後、

今日の研修の内容を聞いてみた。

本城は少し迷った末、笑いながら、

今日は休みにしようか。

と言った。

「わかりました。また、明日も来ます」

そう言って、健介は部屋を出た。

第9話 検索結果 2

健介は再び資料室に立っていた。

ここはほとんど使われていないようだ。

また、健介しか人がいない。

パソコンの前に座る。

「本城竜彦」

すばやくキーをたたく。

先ほどの本城の様子を見た健介の手がひとりでに動いたのだ。

数百件のヒットがあった。

どのタイトルを見ても本城の榮譽を書き記したものだとなった。

しばらく天井を見上げる。

いや、焦点が合っていないから、空を見つめているのだろう。

先輩の話を思い出し、打つ。

「氷室和貴」

またもや、数百件のヒット。

力はいろいろなところに残る。

郷原は長官の権力。

氷室は自らの実力。

後者は前者に消された。

やはり、数々の功績がタイトルにあがっている。

現在は当時の氷室の位置に本城がいる。

本城と同じように氷室の部屋も警察組織から、
楯やトロフィーや賞状が並んだ豪華な部屋だったのだろう。
2人とも優れた洞察眼を持っていた。

ここで初めて、健介はその2人が似ていることに気づいた。
そして、また、キーをたたく音が部屋に響く。

「氷室竜一」

10件に満たなかった。
以前見たレポート以外よさそうなのはなかった。

健介は立ち上がり、その「氷室家の事故死」を棚から抜き出した。
そして、長机に広げる。

氷室竜一の文字だけを搜索する。
無数に散らばる文字の中からその4文字を拾い集める。
それは、海に沈んだ小石を探し当てるよりたやすかった。

「氷室竜一（8歳）」の字を見つける。
健介は記憶の中の情報と照らし合わせる。
これもまた、海の小石よりやさしかった。
もつとも、自分の情報が海ほどの広さだとはいわないが。

現在、本城竜彦は23歳。そう、僕より3歳上だ。
そして、ストリートチルドレン抹殺は15年前。
本城竜彦は当時8歳。

……だからどうした。
本城刑事と氷室竜一は別人に決まっている。
なんせ、氷室竜一は死んでいるのだから。

第10話 憩いの場 3

やはり、先輩はあの、憩いの場でコーヒーとサンドイッチだった。いや、コーヒーを飲み、サンドイッチを食べていた。仕事をしていないのだろうか、と思うのだが、今回はこちらに都合なので、気にしないことにした。

先輩は近寄ってきた健介を見上げて言った。

「こりゃ、どーも。佐藤さん」

「その佐藤さんが先輩に聞きたいことがあるんです」

健介は答えた。

「どうした？中条？」

名前覚えてるじゃないか。

毎回のことなので普段は気にしないのだが、ことが急なだけに、苛立っていた。

あの資料室での希望、いや、希望とはいえない、発見だ。発見を確かめなければならない。

「例の発令、ストリートチルドレンのことです」

先輩は、座れ、と言い、晩御飯を進めてきた。もう、夕方だった。

落ち着いて断ってから、切り出した。

「氷室家の息子の竜一はまだ生きていますか？」

単刀直入だ。これに勝るストレートはない。

先輩は目をこわばらせ言った。

「ああ、生きている」

「やっぱり」

「また、調べてみたんだがな、

ストリートチルドレン抹殺では、竜一は死ななかったらしい」

「なぜ？トップレベルの殺し屋達が数人いたんでしょう？」

「その一人であり、リーダーだった津田俊彦が竜一をかくまったそうだ」

まさか、意外な名前が出てきた。

今回担当した事件の被害者ではないか。

「そして、郷原には嘘の報告をして竜一は死んだということになった」

健介はしばらく空を見つめて考え、聞いてみた。

「その竜一と本城刑事は同一人物ってことはないのですか？」

先輩は笑った。

「そんなわけないだろ。竜一はどこかでひっそり暮らしてるんじゃない」

ないか？」

やっぱり、自分の憶測に過ぎなかったのか。

健介は肩を落とした。

いや、しかし竜一が生きているかもしれないということはわかった。これも大きな収穫だ。

そんな考えは先輩の質問にもみ消された。

「ところで、本城刑事にそれについてのことを聞いてみたのか？」

「はい、本城刑事も調べたことはあるそうですが、詳しいことは知らないそうです。

あ、でもなんか少し様子がおかしかったです。

それで、さっきみたいなこと考えたんですけどね」

「なるほどな。さて、俺は仕事に戻るか。

お前疲れてるだろ？

俺が飯をおごってやるよ。

ほれ」

そう言って、千円札をくれた。

ここ最近でお札の柄がよく変わった。

国の代表がコロコロしているからなあ、と思った。

気づくと先輩はどこかへ行った後だった。

健介はカウンターでカレーライスを注文した。

第11話 復讐

健介は食事を終えてもいすに座っていた。
そして、考えた。

もし、僕が氷室竜一ならどうする？

そして、氷室竜一と本城竜彦が同一人物だとしたら。
津田俊彦に保護され、名前を変え、刑事になり、
実績をあげたところで、親代わりの人物を殺される。

加害者は郷原命。

おまけに、郷原命は両親を殺害した郷原武志の息子だ。
郷原一族に周りの大切な人を奪われた。
どうする？

「復讐」

健介はそう呟いて、椅子を倒して駆け出した。

30分後、健介は本部のエレベーターに乗り、34階へ向かっていた。
た。

ドアが開くと同時に本城の部屋に駆け込んだ。
そこには本城の姿はなかった。

しかし、部屋の電気はついていたので、まだ、近くにいるのかもしれない。

35階へ上がった。

エレベーターから伸びるまっすぐな廊下の一番奥の、
両開きの扉の上に「郷原 命長官」と書かれている。

廊下には人が健介以外いなかった。

本来、立ち入り禁止なのだろうが、今はそんなこと言ってられない。

扉の近くによつてみた。

中から声が聞こえる。

扉が少し開いているようだ。

かすかに中が見える。

「郷原命。なぜ、津田俊彦を殺した？言わなければ撃つぞ」

銀の拳銃を構えた本城の姿が見えた。

「え、あ、あれだ。俺をこ、殺そうとしていると聞いたからだ」

郷原命声は震えきっていた。

本城は完全に郷原を圧倒しているのだろう。

「なるほどな。じゃあ、本当に殺したんだな」

真犯人があつさりと確定した。

郷原のしまった、といった顔を確認してから、本城は続けた。

「俺の親はお前の親父に殺されたんだよ」

そう言つて顔に手をやった。

そして、目から何かを取り出したようだ。

床に何か落ちた。

「カラーコンタクト……銀眼……氷室」

郷原が途切れ途切れに漏らした。

最初、健介は意味がわからなかった。

頭の情報が重なり合うにつれて、形をなしていった。

「お前は、氷室竜一なのか。親父が殺したはずじゃ……」

郷原命はストリートチルドレン抹殺の事件を知っているようだ。
やはり、本城が氷室竜一だったのだ。

カラーコンタクトで銀眼を隠していたというわけだ。
あの黒い瞳は偽りのものだった。

郷原命は大声で怒鳴った。

「おい、聞いてないぞ！出て来い、津田！」

健介は耳を疑った。

そして、本城……いや、氷室の顔にも驚きの表情がうかがえた。

部屋の奥から見覚えのある人物が出てきた。

どこかに隠れていたようだ。

津田ではない。

津田と呼ばれた男が言った。

「俺は知ってたんだがな、郷原」

ふざけるな、そう言って郷原が津田と呼ばれた男に殴りかかった。

しかし、銃弾がそれをさえぎった。

郷原は血を噴出して、倒れた、いや、死んだ。

「お前が早く殺さないからだぞ、竜一」

津田と呼ばれた男が氷室に言った。
さらに続けた。

「お前もわからないことが多いだろう。俺は津田の顔でもないしな。
この部屋は完全防音だから、銃声も外に漏れていないだろう」

そう言って、扉のほうを見た。

「開いてるじゃないか」

その瞬間、健介は拳銃を構えて部屋の中に入っていた。
目の前の2人は驚いていた。

「中条君」

本城、いや、氷室が驚いた顔で言った。

「お？お前誰だっけ？」

笑いながら、津田と呼ばれた男が言った。

「先輩！なんですか？」

健介は叫んでいた。

健介の前にいた、津田と呼ばれた男、それは、先輩だった。

「まあ、待て。銃を下ろせよ」

健介は言うとおりにした。

邪魔が入ったら面倒だろ、と言って、先輩は健介を横切り、扉を閉めた。

先輩は元の位置の戻った。

氷室がまず口を開いた。

「津田さん……なんですか？俺の知ってる顔とは違う」

「それを説明するのも今回の計画から話さなければな、俺は、郷原に本城を殺さないか、と持ちかけた。

そして、俺は殺されたふりをした。

そのことによって、俺は存在が消えたわけだ。
だから、一人の刑事をのつつたわけだ」

氷室は口をはさんだ。

「のつつた、ってことは。

殺したんですね？家族も」

津田は笑った。

「そのとおりだ」

健介は先輩が代わっていたことに気づかなかった。

あの気さくな先輩がこんなやつに代わっていたことに驚いて、
口をきけなかった。

「中条。変わったとき気づかれるかと思っただ、
お前のバカっぷりには笑わされたぜ

それと変装の自信を取り戻させてもらったよ

「殺し屋は変装もできるんだぜ」

健介は津田に銃を向けた。
まだ、津田は笑っていた。

「俺は、どうやって、竜一に接触しようか悩んでいたんだ」

氷室がその先を見通して言った。

「そして、レポートを持った中条君が現れたわけだ」

「ああ、ラッキーだったな。」

津田俊彦が経験したことを中条に徐々に教えていき、
竜一にも伝えさせる。

そうすることで、結局はここに集まるように仕向けたんだ」

健介は怒りをあらわにして怒鳴った。

「そんなことなら、先輩を殺さずに直接、郷原を殺せばよかったじゃないか！」

「それじゃあ、だめなんだ。」

俺の目的は、氷室と郷原を足をつかせずに殺害することだからな」

氷室は驚いて聞き返した。

「俺を殺す？冗談でしょう？」

まあ、聞けよ、と言って津田は話し始めた。

「俺と、氷室和貴と郷原武志は同期で親友だった。だが、俺だけ、2人より能力が低く、だんだん離されていった。そして、縁を切ったも同然のようにあしらわれた。2人をうらみながら、殺し屋に転職したんだ。そして、ストリートチルドレン抹殺のときに竜一を拾った。郷原は警察のトップだったから、警察内部にしのばせる武器として、

育てるために拾ったんだよ。

お前が氷室竜一だと名乗った以外にも氷室の息子だとわかる理由があった。

お前がつけているペンダントだ。そして、そこに倒れている郷原もつけているだろうな。代々、これを守っていこうな、と親友の間で交わした、クサイ約束だ」

氷室はそばに倒れている、郷原の胸元を探った。銀色のペンダントが垂れていた。

氷室は立ち上がり、自分のペンダントを掲げた。同じ銀のペンダント。

昔、父からもらったペンダント。

津田も胸元から取り出した。

「報復のしるしだ。俺を認めさせてやるんだ」

ペンダントを放り投げ、空を舞うペンダントを銃で撃ち抜いた。ペンダントが三つに裂けた。

あの3人のように。

氷室は津田に銃を構えた。

そして、微笑を交えながら言った。

「あなたに教えてもらった銃で、あなたを殺すことになるとは」

津田の顔つきが変わった。

怒りがあふれているように見えた。

「その微笑、いやなとこだけ、親父に似るんだな、死んでくれ」

津田は氷室に銃を構え、引き金に指を添えた。

さらに、もう一丁腰のホルスターから銃を取り出し、健介に構えた。

「中条。お前を殺せば完全犯罪だ。

もう、この世には津田俊彦はいない。

俺は無事にここ脱出して、お前の先輩だったやつとして生きる」

健介は津田に銃を向けた。

「あなたを撃つなんて」

津田は笑う。

「撃てるのか？」

健介は何も言わなかった。

氷室が代わりに口を開いた。

「さあ、誰が勝つか？俺は撃たれる気はないです」

氷室はペンダントを投げ捨てた。

銃声が響いた。

「終わり」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4415a/>

シルバー・ガン

2010年10月10日04時59分発行